

日本語を母語とする場面緘黙児における言語能力の特徴—保護者記入型の質問紙検査を用いた検証—

高木潤野(長野大学 社会福祉学部 准教授)

場面緘黙は、話す力を有しているにも関わらず、学校や職場等の特定の社会的状況において話すことができなくなってしまう状態である。場面緘黙状態発現に関わる要因の1つに言語能力の問題がある。海外の研究では、場面緘黙児の半数程度に言語発達の遅れや言語障害がみられることが指摘されているが、日本語を母語とする場面緘黙児に対しては研究が行われていない。本研究では、保護者記入型の質問紙検査である CCC-2 (Children's Communication Checklist-2) を用いて、日本語を母語とする場面緘黙児の言語能力の特徴を明らかにすることを目的とした。

場面緘黙を主訴とする未就学児から中学生 49 名を対象に、CCC-2、SMQ-R、PARS-TR、音声の聴取、及び生育歴等の聴き取りを実施した。CCC-2 は 10 領域 (A: 音声、B: 文法、C: 意味、D: 首尾一貫、E: 場面に不適切な話し方、F: 定型化されたことば、G: コミュニケーション場面の利用 (文脈の利用)、H: 非言語コミュニケーション、I: 社会的関係、J: 興味関心) 各 7 問、計 70 問で構成されており、このうち A~D は言語の構造についての側面、E~H は言語の使用の側面 (語用論的側面)、I 及び J は自閉性障害側面をそれぞれ評価する。A~H の得点により算出する GCC (一般コミュニケーション能力群) 及び E、H、I、J の合計から A、B、C、D の得点を引いた値である SIDC (社会的やりとり能力の逸脱群) の 2 つの指標によって子どもの言語能力や語用能力をスクリーニングすることができる。SMQ-R、CCC-2、PARS-TR 及び生育歴等の聴き取りについては、保護者を対象に半構造化面接により実施した。音声の聴取は、調査場面での聴き取り、または IC レコーダを用いた録音によって行った。

音声の聴取の結果、構音障害のある者は 49 名中 4 名 (12.9%)、吃音のある者は 49 名中 2 名 (6.5%) であった。一般コミュニケーション能力である GCC の平均値は 56.4 であり、約 12 パーセントイルに相当する値であった。一方、社会的やりとり能力の逸脱を示す SIDC は平均値は -3.28 であった。領域別では A~H のいずれの領域も評価点の平均は 9 未満であり、特に I (社会的関係) 及び G (コミュニケーション場面の利用) が低い傾向がみられた。個人別にみると、GCC の値について 10% のカットオフ値 54 以下の対象児は 49 名中 27 名 (55.1%) であった。またより厳しい基準である 3% のカットオフ値 44 でも 49 名中 10 名 (22.4%) が該当した。言語障害又は言語能力の低さがみられた対象児は、49 名中 30 名 (61.2%) であった。

上記の結果から、日本語を母語とする場面緘黙児の半数程度には言語障害または言語能力の低さがみられる可能性が考えられた。これは、50% に言語発達の未熟さやその他の困難さがあつたとする Kolvin & Fundudis (1981) の結果を概ね支持するものであつたと言える。その一方で、Steinhausen & Juzi (1996) や Kristensen (2000) ではそれぞれ 38%、50% に言語障害があつたとされているが、本研究では構音障害又は吃音のみられた者は併せて約 20% 程度であつた。これは、上記の先行研究ではより詳細な言語検査により表出性言語障害や受容・表出混合性言語障害を評価しているためことが関わっていると考えられる。

また基準に従い SIDC を算出した 27 名中 19 名は負の値であり、社会的やりとり能力の逸脱があることが示された。CCC-2 の各領域の結果についても、特に I (社会的関係) 及び G (コミュニケーション場面の利用) が低かつたことから、このような特徴のみられる場面緘黙児については、言語能力の低さだけでなくそれらを用いてコミュニケーションをする方の問題から、社会的状況において「話せない」という状態になっている可能性が考えられた。言語能力のどのような側面が場面緘黙状態の発現や維持に関わっているかについては、今後より詳細な検討が必要であると言える。

本研究の意義として、日本語を母語とする場面緘黙児の多くが言語能力の問題も有している可能性を明らかにすることができたことが挙げられる。場面緘黙の持つ「ことばの問題」としての側面が新たに示され、より包括的な場面緘黙の理解が可能になったと考えられる。言語の発達と障害に関してはこれまで多くの研究の蓄積があることから、「ことばの問題」としての側面から研究を進めることで、今後より場面緘黙の実態の解明が進められることが期待される。また、上記の点を踏まえた新たなアセスメント及び介入の視点を得ることができた。

今後の課題として、標準化された言語検査等による言語能力の評価、ASD だけでなくその他の発達障害や言語障害との関係についての検討、及び本研究の成果を踏まえたアセスメントと介入方法の確立が挙げられる。言語能力については、音韻や統語だけでなく、より日常的な「語り」の分析として近年注目されている「ナラティブ」の評価や、語用論的側面の評価が必要ではないかと考えられる。(共同研究者 臼井なずな: 信州上田医療センター)